

銭形平次捕物控

蜘蛛の巣

野村胡堂

青空文庫

一

「親分は？ お静さん」

久し振りに来たお品は、挨拶が済むと、こう狭い家の中を見廻すのでした。一時は本ほんじ所で鳴らした御用聞——石原の利助の一人娘で、美しさも、俐りはつ発はつさも申分のない女ですが、父親の利助が軽い中風で倒れてからは、多勢の子分を操縦して、見事十手捕縄を守りつづけ、世間からは「娘御用聞」と有難くないあだな綽名あだなで呼ばれているお品だったのです。

とつて二十三のお品は、物腰も思慮も、苦勞を知らないお静よりはぐつと老けて見えませんが、長い交際で、二人は友達以上の親しきでした。

「何か御用？」

お静はお茶の仕度に余念もない姿です。

「え、少しむずかしい事があって、親分の智恵を借りたいと思って来たんだけど——」
 「生あいにく憎にくね、急の御用で駿府すんぶへ行ったの、月末でなきや戻りませんよ——八五郎さんじゃどう？」

「親分がお留守じや仕様がなねえ。——八五郎さんにもお願いしようかしら」

お品は淋しく笑いました。ガラツ八の八五郎の人の良さと、頼りなさは、知り過ぎるほどよく知っております。

「八五郎さん、ちよいと」

お静が声を掛けると、いきなり大一番の咳せきをして、

「お品さんいらつしやい」

又ツと長い顔なんがを出すのです。

「まア、八五郎さんそこに居なすつたの。あんまり静かにしているから、気が付かないじやありませんか」

お品は面白そうに笑うのです。

「あつしでも間に合いますかえ」

「まあ、悪かつたわねエ。——八五郎さんが来て下さると本当にありがたい仕合せで——」
ガラツ八は撥くすぐったく、首筋を搔くのです。でも、そんな事に長くこだわっている八五郎ではありませんでした。お品が事件の説明を始めるともう夢中になって、いっぱし御用聞の出店くらいは引受ける気だったのです。

お品が持込んで来た事件というのは、お品の家とは背中合せの、同じ本所石原町に長く質屋渡世をし、本所分限者ぶんげんしゃの一人に数えられている吾妻屋金右衛門あずまやが、昨夜誰かに殺されて、今朝になつて発見した騒ぎでした。

「家の新吉が下つ引を二三人連れて行つたけれど、こね廻すだけで判りやしません。そのうちに三輪みのわの親分の耳にでも入つたら、どうせ黙つて見ぢやないだろうし、——本当に八五郎さんが行つて下さると助かりますよ」

お品の調子はしんみりしました。

「うまく言うぜ、お品さん」

そんな事を言いながらも、八五郎はお品と一緒に石原町まで駆け付けていたのです。

「それでは八五郎さん」

吾妻屋の入口から別れて帰ろうとするお品。

「お品さんも現場を見ておく方がいいぜ」

「でも、私が顔を出しちや悪いでしょう。そうでなくてさえ娘御用聞とか何とか、嫌な事を言われるんですもの——」

「近所付合いだ。見舞客のような顔をして行く術てもあるぜ」

「そうね」

お品は強^しいても争わず、八五郎と一緒に吾妻屋の暖簾^{のれん}をくぐっておりまして。

「お、八五郎親分」

迎えてくれたのは利助の子分で、ともかくも十手を預かっている新吉でした。

「たいそうな厄介な事があつたんだつてね。ちよつと覗^{のぞ}かして貰うぜ、新吉兄哥^{あにい}」

八五郎はひどく好い調子です。

吾妻屋金右衛門はその時六十一、生涯を物欲に委^{ゆた}ね切つて、ずいぶん無理な金を溜めたためにさんざん諸人の怨^{うら}みを買つたらしく、先年女房に死に別れ、放^{ほう}埒^{ちつ}な倅^{せがれ}を勘当して、娘のお喜多一人を頼りに暮すようになってからはめつきり気が弱くなり、ことに近頃は、一種の強迫観念に囚^{とら}われて、「誰か自分を殺しに来る」「俺はきつと近い内に殺されるに違^{ちが}いがない」と言いつづけている有様でした。

そんな事から日常生活が恐ろしく神経質になり、半歳ほど前からは、我慢がなり兼ねて、権現堂^{ごんげんどう}の力松^{りきまつ}という男を用心棒^{やしこ}に雇い入れ、自分は母屋^{おもや}から廊下つづきの離屋^{はなれ}の二階に住んで、娘と下女のお石と、番頭の周助と、用心棒の力松の外には、滅多な人間を寄せ付けないような暮し方をしていたのでした。

主人金右衛門の死骸は検屍が済んだばかりで、二階の八畳に寝かしたまま、形ばかりの香華を供えて、娘のお喜多が駆け付け付けた親類の者や近所の衆に應對し、下女のお石は忙しそうにお茶などを運んでおります。

お喜多は豊麗な感じのする娘で、年の頃十九か二十歳。悲しみも窒息させることの出来ない健康な美しさが、場所柄に似合わず四方に放散しましたが、下女のお石は二十四五年増。蒼白い顔が少し弱々しく見えますが、粗末な身扮に似合わぬ美しさと、存分に装わせたなら、お喜多に劣らぬ容貌になるでしょう。八五郎は咄嗟のあいだに二人の若い女を觀察すると、死骸の傍に膝行り寄つて、いつも親分の平次がするように、ていねいに拝んでから、顔を蔽つてある白い布を取りました。

「……………」

思いのほか穏やかな死顔です。六十一というにしては、ひどく頽然としていますが、これが半生金儲けに熱中して、石原町の鬼と言われた人間の死顔とも思われません。

首筋のあたりを見ると、間違いもなく細紐ほそひもで絞められた跡がありますが、それも至つて薄く、首が畸形的きけいてきに伸びてない点など、自殺でないことは馴れた八五郎には一と眼でわかります。

「縄も紐もなかったよ。——自分でやったのじゃない」

新吉は注ちゆうを入れました。

「一番先に見付けたのは？」

「私でございます」

お茶道具を片付けていた下女のお石は、少し事務的にハキハキと答えました。

「どんな様子だった」

とガラツ八。

「いつものように、南側の雨戸を開けて声を掛けましたが、お返事がありません。障子を開けて見ると——」

お石はさすがに息を呑みます。

「床とこの上にいたのか、それとも——」

「床から脱け出して、その辺に」

長押なげしの下のあたりを指した手を、お石はあわてて引込めました。そこには娘のお喜多おきがしよんぼり坐まっていたのです。

「どんな恰好かっこうで」

「お寝巻うつむのまま、俯向きうつむになっていました」

「確かに俯向きうつむだろうな」

「え、さいしよは居眠りいみりしていらつしやるのかと思つたくらいです」

「縄も紐もなかつたのだな」

「え」

「東側の窓は？」

「半分開いたままで、朝陽が一パイに射していました」

お石の知しっているのは、それだけのことです。

いちおう間取りの具合を見ましたが、二階は八畳一間だけ。階下は母屋おもやと廊下つなで繋がつて、六畳と四畳半の二た間。四畳半は物置同様で、六畳には用心棒の力松が夜昼の別なく頑張がんぢやうっているのです。

「曲者くせものはどこから入つたんだ」

ガラツ八が思わずこう言ったのも無理のないことでした。

「それだよ、八五郎親分」

新吉は八五郎の顔に拡がる困惑を享樂するように、階下から二階を案内します。二階の八畳は西と北が塞ふさがつて、南は縁側、梯子はしごでも掛けて内から雨戸を開けて貰わなければここからは入れそうもありません。

「雨戸は？」

「そこは念入りに閉めてあつたそうだ。用心棒の力松と下女のお石と番頭の周助の口くちが揃そろうからこいつは疑いようはねえ。もつとも開けつ放してあつたにしても、梯子でもなきやその危ひない庇さしに飛付いて二階へ辿たどり着けつこはねえ」

新吉は狭くて高い庇や、梯子の跡などはない中庭の湿しめつた土などを指すのでした。二間ほどの空間を隔てて、向うは恐ろしくやわな忍び返し、恋こい猫ねこが踏んでも一とたまりもなく落ちそうです。

「こつちは開いていたんだね」

東の方は腰高窓、そこを開けると、これはずいぶん塀伝いに登れないことはありません。「主人の金右衛門が疝かん性しょうで、どこか開いていなきや夜寝付けなかつたというぜ」

新吉の言葉には妙に思わせ振りなところがあります。

「それじゃ、曲者はここから入ったと言っているようなものじゃないか」

八五郎の高くない鼻は少し蠢うごめきます。

「ところが、窓いっぱいには張った女郎蜘蛛じよろうくぐもの巣があるだろう」

「……………」

「今朝来て見た時からそいつがあつたんだ。どんな器用な曲者だって、蜘蛛の巣を潜くぐつちや入れないよ」

ガラツ八は一言もありません。陽を受けてキラキラと光る美しい蜘蛛の巣は、こうなると金網よりも嚴重に見えるのです。

残るのは梯子段が一つ、その下には用心棒の力松が、一と晩頑張っていたことに間違いはなく、力松が下手人でない限り、ここから曲者が忍び込むことなどは思いも寄りません。「すると?」

「曲者は家の者だ——。それも主人の寝ている二階へ自由に出入りの出来るものは、番頭の周助か、下女のお石か、娘のお喜多か、用心棒の力松の外にはないことになる」

新吉は自分の智慧を小出しに見せつけて、ひそやかなる優越感にひたっている様子です。

「一番後で主人に逢つたのは？」

「力松だよ。——もつとも日頃丈夫でない主人は二三日前から寝たり起きたりしていたそうだ。現に昨日も気分が悪いからと、昼過ぎから床を取らせて、晩飯も抜きにしたというから、誰も日暮前から二階へは行かなかつたらしい」

そう言われるといよいよ怪しくなるのは用心棒の力松です。

三

「た、大変ッ」

「親分、ちよいと来て下さい」

階下から、急に、遽はげしい声。

「なんだなんだ」

八五郎と新吉が梯子段をころがるように降りて行くと、六畳では用心棒の力松を中心に、番頭の周助以下五六人の者が、何やら滅茶苦茶に揉もみ合っているのです。

「力松が腹を切るって言うんです」

「止めて下さい。親分」

見ると大肌脱ぎになった力松の手から、五六人の者があいくちヒ首をもぎ取ろうと必死の騒ぎです。

草角力くさずもうの大関で、柔術やわら、剣術一と通りの心得はあるという触れ込みで雇われた力松が、刃物を持っているのですから、これは容易ならぬことでした。

「止よせ。——止さないか、力松」

新吉が声を掛けると、力松はさすがにがつくり首をうな垂れます。ヒ首はいつの間にか奪い去られて、真夏ながらたくま遅い大肌脱ぎが寒そう。

「相済みません。——でも親分方、旦那が殺されたのは、何と言つてもあつしの油断ですぜ。——高い給金を貰つて、旦那の命を預かっていながら、こんなことになつちや申し訳がねえ。せめて腹でも切らなきや」

力松はそう言つて口惜くやしがるのです。一国らしい中年者で、田園の匂いが全身に溢あふれるだけに、この男に嘘があるうとは思われません。

「お前は本当に寝ているうちに曲者が二階へ登つたと思うのか」

八五郎は要領の良い口を出しました。

「そんなはずはないから、不思議なんで。あつしはね親分、ほかに取柄とりえはないが、酒を飲まないのと眼敏めびといのが自慢なんで——旦那がそれを見込んで年に十二両という高い給金を出して下さったんだ。梯子段の下に寝ているあつしの身体を跨またいで、二階へ登ってあんな大それた業わざをするのは、石川五右衛門だつて出来ることじゃありませんよ。それに廊下の雨戸は上下の棧さんをおろした上、いちいち門かぬぎが入っているんですよ」

いま腹を切ろうとした力松は、勢いよく弁じ立てるのです。なるほどそう言えば、力松に眠り薬でも吞ませない限り、この関所は通れそうもなく、よしんば力松を買収したところで、ここからさまで遠くない店の衆の寢息うかがを窺うかがつて、曲者を引入れるのも容易な業ではありません。

「それほど申し訳の筋が立つなら、腹を切るにも及ぶまい——とところでお前がここに雇われた筋道はどうなんだ」

新吉は一步踏込みます。

「あつしの叔母が、大旦那の里親だったんで、毎年の出代り時には、今でも叔母の子——あつしの従弟いとこが吾妻屋の奉公人を引受けて、村から出します。番頭さんは江戸者だが、店中の者は皆んな同じ村の生れですよ」

「そうか」

そう聴けば、力があつて、少しは武術の心得のある百姓の倅力松が、並の雇人の三倍の給料で、用心棒に雇われても何の不思議もありません。

娘のお喜多は、ただおろおろするだけ、昨日の昼から父親に逢わないという以外には、何の役に立つことも言つてくれません。

番頭の周助は五十年配の強^{したた}か者で、商売には抜け目がないという評判ですが、主人の財産を殖やすと同じ率で、自分の貯蓄も殖やして行くほかには、さして悪巧みがあるうとも思われません。こんな男にとつては、主人の暖簾^{のれん}と威光が何よりの頼りで、まさか金の卵を産む鷲^{がちょう}鳥を絞め殺すほどの無分別者とは思われなかつたのです。

「昨夜は何か変つたことがなかつたのか」

ガラツ八の一応の問いに対して、

「へエ、何の変つたこともございません。旦那様はお加減が悪いということ、昼過ぎから離屋^{はなれ}へ参るのを遠慮しておりました。店は戌刻半^{いっつ}（九時）頃に閉めました、それから帳合をして私は亥刻半^{よっ}（十一時）ごろ家へ帰りました。——私の家はツイ背中合せの、石原の親分さんのお隣でございます」

念入りすぎる答えですが、この言葉からは少しの怪しい節も見出されません。

「主人を怨うらんでいる者があつたそうだが、誰と誰だ」

「さア、それはいちいち申すわけにも参りませんが——こんな商売をしておりますと、ツイ筋違いの怨みを買うこともございます」

「商売の外にも怨みを買つたそうじゃないか」

「へエ——」

「若旦那はどうしたんだ」

「若旦那の金五郎様は、親御様と仲違いなすつて、木更津きざらづの御親類にいらつしやいます」

「仲違い？」

「何と申しても、お若いことですから」

番頭の周助も吾妻屋の家庭の事については容易に口を開きませんが、これは隣に住んでいる新吉が後で詳しく聴くわきました。

倅の金五郎の家出の原因というのは、少し遊びすぎただけの事で、大した問題ではありませんが、それより吾妻屋にとって鬱陶うつとうしい問題は、ツイ地続きの隣に住んでいる、田島屋との紛紜いざいざでした。田島屋というのは、二階の東窓から眼の下に見える小さい住居で、

若い主人の文次郎はささやかな背負い呉服を渡世にしておりますが、昔は吾妻屋と並んだ町内の分限ぶげんで、死んだ先代の頃、吾妻屋と組んで仕入れた上方の織物で大きな損をし、吾妻屋が巧みに逃げたために、一人で引受けて身代を潰つぶしたのだと言われております。

その上文次郎と吾妻屋の娘お喜多が許いいなすけ嫁けの仲だったのを、田島屋がいけなくなると、吾妻屋金右衛門方から反古ほごにし、近頃は文次郎を寄せ付けなばかりか、往来で逢つても口もきかないので、文次郎はひどく吾妻屋を怨み、「折があつたら、あの親仁おやしを叩き殺す」とまで放言していたというのです。

二十八になつて、背負い呉服屋に身を落した上、お喜多との仲まで割かれた文次郎は、血の気の多い男で、随分それくらいのはやり兼ねないように、町内の人達からも思われているのでした。

四

翌あくる日、石原町へ行つたガラツ八は、思いも寄らぬ事件の展開を聴かされました。

「八五郎親分、困つたことになつたぜ」

新吉は言うのでした。

「何がどうしたんだ」

「三輪の万七親分が乗り出して、用心棒の力松を縛って行ったよ」

「へエ——、証拠が挙がったのかい」

「証拠のないのが証拠だというんだ。二階の南側の縁側からは入れず、東窓にはでつかい蜘蛛くもの巣があるから、曲者は梯子はしごを登って行ったに違いない。梯子の下には力松が夜つびてとぐろを巻いているとすると、下手人げしゅにんは力松の外にないというんだ」

新吉もこの理論には争いようがなかったのです。

「それだけのことか」

とガラツ八。

「だから変じゃないか」

「力松は何が望みで主人を殺したんだ。年に十二両という大金を下さる主人だぜ」

「俺もそう言ったが、万七親分は、力松の野郎は纏まとまった金でも欲しかつたんだろうとうんだ。ところが纏まとまった金は離屋の二階などにおくはずはない。金右衛門は身近に刃物とか金をおくことが大嫌いだつたんだ。万一悪者が忍び込んで、それを使ったり、使われ

たりしちや困るといふんだそうだよ。金はみんな土蔵の中の恐ろしくがんじょう 巖 乗な金箱に入
れて、いちいち念入りに錠をおろしてある」

「それでも力松が下手人だというのか」

「三輪の親分には、別に考えがあるんだろう。それにしても口惜くやしいじゃないか、こんな
とき銭形の親分がいてくれたら」

新吉はつくづくそう言うのです。ガラツ八の八五郎では、何としても力になりません。

「気にするなつてことよ、こつちで本当の下手人を挙げりやいいんだろう」

「それだよ。——俺は隣の——田島屋の文次郎が怪しくて仕様がないうんだが」

「そいつを当つてみようじゃないか」

「吾妻屋あずまやのために大きい身しんしやう上をフイにして、親父はそれを苦にして死んでいるんだ。

その上お喜多との間を割かれて——あの気性じゃ、黙っているのが不思議でたまらない」

「……………」

「その上、あの日の昼頃、文次郎は裏の空地でお喜多と逢引している。——あの晩、忍び
込んで一と思いにやらないとは限るまい、空地の上はすぐあの東窓だ」

「蜘蛛の巣はどうなるんだ」

「その蜘蛛の巣が、新しくてやけに丈夫だ」

新吉はまた、蜘蛛の巣に頭を突っ込んでしまったのです。

「ともかく、文次郎に逢ってみようじゃないか」

ガラツ八は新吉を誘って、文次郎の貧しい家を訪ねました。

背負い呉服の細い商売で、辛からくも母一人養っている文次郎は、二人の御用聞の顔を見ると、あわてて外へ飛出して、

「親分さん方、後生だからお話は外で願います。年を取ったお袋に苦勞をかけたくはありません」

と手を合せぬばかりにしますのです。

二十七八の苦味走った好い男、血の気の多い氣象者らしいところはありますが、それでも年寄りの母の気持を考えて、御用聞を外へ誘い出すといった心やりはあります。

「あの日お前はお喜多さんと逢っていたそうじゃないか」

「へエ——」

新吉の問いは露骨です。

「まだお前たちは付き合っていたのか」

「へエ——、面目次第もございません。——親御（金右衛門）のお許しがあれば、いつでも一緒になる気でおりました」

「お前は吾妻屋を怨んでいたろうな」

「へエ——」

お喜多の父親に対する怨みとも憤りとも、親しさとも憎さともつかぬ不思議な心持に悩んでいる文次郎は何と言つていいか迷つた様子です。

「あの晩お前はどこへ行つていたんだ。夕方から留守だったそうじゃないか」

「少しばかりの掛かけを集めて、あんまり汗になつたから途中で一と風呂入つて戻りました」

「掛は、どことどこで集めたんだ。——風呂はどこのだ」

「さア」

文次郎は困惑した様子です。

「数の多いことですし、度々のことで、よくは覚えてはいません」

「思い出しておくがいい。その証明が立たなきや、お前にも人殺しの疑いが懸るよ」

「……………」

文次郎の顔はサツと血の気を失いましたが、それつきり口を緘つぶんでしまいました。

蜘蛛の巣さえなければ、この男を助けておくのではなかったといった不思議な焦躁しやうそうが、新吉の胸をさいなみ始めた様子です。

五

鬱陶うつとうしい日がつづきました。親分の錢形平次はまだ帰らず、お静を相手の留守番には八五郎の叔母が行ってくれましたが、石原町の吾妻屋殺しの方はいっこう目鼻もつかなくなつたのです。三日目の昼頃。

「八五郎さんは」

飛び込んで来たのは、「娘御用聞」のお品と、田島屋文次郎の母親でした。

「お品さん、何か変つたことでも——」

八五郎は頼まれ事の埒らちのあかないのに気を腐らせながらも、大して極きまりを悪がる様子もなく顔を出しました。

「新吉が文次郎さんを縛ってしまいましたよ。おつ母かさんに泣き込まれて、私も弱つてしまいました。新吉へかれこれ言うわけにも行かず、そうかと言って田島屋のおつ母さんと

は、お隣付き合いで、子供の時分からお世話になっているし」

お品はよほど困った様子です。その後から、

「八五郎親分、倅を助けて下さい。倅は気の早い男だけれど、お喜多さんのお父さんを殺すようなそんな悪い人間じゃありません。新吉さんは——、あの晩倅がどこに居たか、はつきりしないから怪しいって言うそうだけれど、私はよく知っております。倅はお喜多さんに呼出されて、裏の空地で話していたんです」

涙ながらに言う老母の言葉の、妙に辻褄つじつまの合った真実性が、八五郎の胸こゝろに徹こたえます。

「よし、行ってみるとしよう、何かの間違いだろう」

飛出した八五郎は、一気に石原町へ——、利助の家には、幸い新吉もおりました。

「新吉哥哥、大変なことをやっただってね」

八五郎の調子は頭ごなしです。

「何が大変」

新吉は少し屹ぎつとなりました。

「文次郎を挙げたそうじゃないか。——あの男は下手人じゃあるまい、現に蜘蛛の巣——」
「俺もあの蜘蛛の巣に頭を突っ込んで、三日というものを無駄に過したんだ。ところが、

その間に三輪の万七親分は、力松を責めて口書きを取ったという話もある。うつかりして
いると、どんな事になるかもわからない」

石原の利助の病びょうく軀びょうくを助けて十手捕縄を預かっている若い新吉にしては、それくらいの
あせりのあるのは無理のないことでした。

「それでも蜘蛛の巣が——」

「蜘蛛の巣は——八五郎親分も知つての通り、新しく綺麗だった。前の晩張つたものに
違いない——あの辺は陽当りが良いから、どうせ陽のあたるうちに蜘蛛は働く氣遣いはな
い。八五郎親分にこんな事を言うのは変だが蜘蛛が巣を張るのは大抵夕方薄暗い頃だ。あ
の巣だつて昼のうちは無かつたに違いない——ということに気が付いたんだ」

「……………」

「文次郎は薄暗くなるのを狙ねらつて、蜘蛛が巣を張る前にあの東窓から入つて、吾妻屋を殺
して脱け出した。それで何もかも解るじやないか。ね、八五郎親分」

新吉の顔には蔽おほい切れない得意の色が漲みなぎります。ガラツ八の八五郎は、指を唾くわえて引下
がるほかはありません。蜘蛛の習性に通じなかつたのが何としても八五郎の手ぬかりです。
が、しかしこのまま帰つて、まだ吉左右きつそうを待つているはずのお品と文次郎の母親に顔を合

せたとき、一体どんな事になるでしょう。

「こいつは弱つたなア」

見掛けに寄らぬ弱気の八五郎は、神田に帰るに帰られず、そのまま、ろくなお小遣もないくせに、親分の平次を迎えに、品川の方へ辿たどつておりました。駿府へ行った平次は、今日か明日は帰らなければならなかつたのです。

*

川崎で平次に逢つた八五郎は、そのまま有無を言わせず、石原町へ引つ張つて行きました。

「待ちなよ、何という事だ。長い旅から帰つたばかりじゃないか。女房も待っているだろうし、こんな顔でも見せて安心さしてよ、それから出直したところで遅くはあるまい」

そんな事を言う平次も、とうとうガラツ八の熱心に負けてしまった事は言うまでもありません。

吾妻屋へ旅装束のままで行つた平次は、内外の様子を念入りに見た上、一人一人を呼び

出して、離屋はなれの、二階で調べました。中でも下女お石とお喜多が念入りで、これはざつと小半刻（一時間たらず）ずつ、一と通りそれが済むと、奉公人から娘お喜多の手廻りの品を見せて貰い、お喜多の持物の中から、中ほどで引き千切った紅鹿べにかの子縮緬こちりめんの扱帯しごぎを一本取出し、それを預かってさつさと神田へ引揚げたのです。

自分の家へ帰って、一と風呂浴びて来て、久しぶりで一本、女房しやくの酌しやくで始めたところへ、我慢のならぬガラツ八が顔を出しました。

「親分、石原町の吾妻屋殺しはどうなつたんです」

「心配するな、もう解つたよ」

「下手人は」

「これだよ」

平次が袂たもととから取出したのは、眼の覚めるような紅鹿の子の扱帯しごぎ。

「その扱帯が下手人？」

八五郎の驚きようはありません。

「そうだよ。——お前には解るまい、ざつと話そう。力松が下手人なら、偽の証拠をうんと拵こしらえておくよ。庭へ梯子はしこを持出すとか、二階の雨戸を外しておくとか。——そんな事で

もしなきや、疑いは真つ向から自分へ来るじゃないか」

「……………」

「文次郎はあの晩東窓の下の空地でお喜多と逢引していたんだ。どこに居たか言われなかつたはずさ。あの男は好きな女の父親を殺すほどの悪人じゃない。——それに蜘蛛の巣は夕方明るいうち張り始める。八方から見通しの二階の東窓へ、蜘蛛が巣を張り始める前に人間が忍び込むなどは思いも寄らない。新吉兄哥は考えすぎたのだよ」

「すると」

「下手人はこの扱帯さ。——吾妻屋の金右衛門はさんざん人を泣かせたむく酬いで、年を取って気が弱くなつたんだ。『誰かに殺されそうだ』と言いつづけていたのは、正気の沙汰ではないよ。——その上倅の勘当や女房の病死ですっかりこの世がいやになり娘のお喜多が何かのはずみで忘れて行つた扱帯を見ると、この燃えるような美しい鹿の子絞りに引かれて、フラフラと死ぬ氣になつた。——金右衛門はときどき自分で死ぬ氣になることがあつたんだ。金右衛門はそれが怖くて、刃物や紐類を身近に置かなかつたんだ」

「すると」

「長押なげしに扱帯をかけて首を吊つたのさ——よく見ると長押は扱帯です擦れた跡があつたよ。」

——が、扱帯が弱いのですぐ切れた。金石衛門は下へドタリと落ちるはずみに、弱つていた心の臓を破つたんだ（心臓破裂）、それつきりさ。死骸の喉のどの跡が薄かったのも首の伸びていないのもそのためだ」

「切れた扱帯はどうしたんです、親分」

「翌る朝あの部屋へ一番先に入った下女のお石が隠したのさ。見覚えのあるお嬢さんのお喜多の扱帯で主人が絞め殺されていると思ひ込んだんだ。何が何でも、こいつは隠さなきゃなるまいと思つた」

「力松や文次郎が縛られて黙っていたのは？」

「二人とも方に一つ処おしおき刑になるような事はあるまいと高をくくつたのさ。あのお石という女は妙に行届いた女だよ。もつともお喜多と逢引する文次郎が憎かつたのかも知れない

——若い女の心持は、俺達には謎だよ」

「するとどうしたものでしょう」

「放つておくがいい。お石じゃないが力松と文次郎はもう帰るだろう。帰らなきや明日にでも八丁堀へ行つてやろう。三輪の親分や新吉兄し哥に強いて恥をかかせたくないが——それより差当つてお静を口説いてもう一本つけさせる工夫をしよう。お前も付き合つてくれ、

「なア八」

平次は杯をあげて、カラカラと笑うのでした。下手人を出さなくていかにも良い心持です。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（十五）茶碗割り」嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年9月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物全集第十七卷 権八の罪」同光社磯部書房

1953（昭和28）年10月10日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1943（昭和18）年6月号

※副題は底本では、「蜘蛛《くも》の巣」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2019年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

蜘蛛の巣

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>